# FIRE から DIE　WITH　ZERO へ

常務取締役　内田多喜生

昨年 5 月の本欄で、筆者は若者層に関心が高まる FIRE（Financial Independence, Retire Early の頭文字、経済的自立による早期退職の意味）を紹介したが、その後、FIRE は一般的な用語として定着し、書店にいけば FIRE に関する書籍は平積みになっている。最近の「iDeCo」や「つみたて NISA」の若者層への浸透も FIRE という言葉が広まったことが一助となったのかもしれない。

表題にある DIE　WITH　ZERO は、FIRE に関心が高い層にも共感を呼んでいる本の書名『DIE　WITH　ZERO』（ビル・パーキンス著、ダイヤモンド社）である。本書は、「経済的に豊かになるだけでなく、人生を豊かにするための方法を考える」ことを目的としている。そのためには、書名にあるように、資産を ZERO にして、死ぬことが最適であるとする。

著者は、アメリカでは世帯主が 70 代になっても未来のために金を貯めようとしていることなどを指摘し、今の生活の質を犠牲にしてまで、老後に備えることは大きな間違いとする。そのうえで人生のある時点から、資産の切り崩しを考えるべきとする。

前述の FIRE に生活費 25 年分の資産を貯め 4%で運用すれば計算上、経済的自立ができるとする「4%ルール」があるように、本書でも純資産を減らすポイントについての提案がある。詳しくは本書を読んでもらいたいが、予測余命に年間生活費をかけるなどして、老後に必要な最低限の資産を計算し、それに達した時点で、次世代以降に渡す部分などを含め、純資産を取り崩す時期を考え始めるというものである。なお、その際は、金融資産だけでなく、リバースモーゲージなどで様々な資産の取り崩しを考える。

ただし、著者がユニークなのは、一般的な資産だけでなく、人生における「経験」を「思い出という配当」を生む資産と見なしていることである。その経験（そこでは次世代以降の経験も含まれる）を得ることを後回しにして必要以上に資産を残すことは、人生最大の楽しみを犠牲にすると強調する。経済的利得と人生経験のトレードオフという考え方は、精神的自由のため経済的自立を目指すという FIRE とも共通する点が多い。

「若い時の苦労は買ってでもしろ」という言葉があるように、「思い出という配当」を生む経験を得られる時期は限られている。みなさんも若い時に苦労して得た経験は、ふとした拍子に思い出す貴重な資産となっているであろう。私事で恐縮だが、郷里の 90 歳近い両親は今では自宅から出ることもめったにない。しかし、帰省の度に、90 年近い人生で得た自分自身、子や孫、友人たちと過ごした経験を、今見てきたように話してくれる。経験は思い出という無限の配当を生んでくれる資産との考え方に共感する人は多いだろう。

本書は、人生の後半期に個人が経済的豊かさと人生の豊かさのバランスをどうとるか、考え方の一つを提示してくれているが、日本全体としても重要な課題である。2019 年 6 月の金融審議会資料では 2035 年に日本の金融資産の 4 割を 70 歳以上が占める一方、同年に最大で 65 歳以上の高齢者の 3 人に一人が認知症になる可能性があるとされている。金融行政、金融機関等も含めどう対応していくか、残された時間はあまりないように感じられる。


ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます